



大倭出版局・大倭紫陽花邑

平成20年
11月号

通巻 459号
毎月23日発行

(題字 矢追日聖)

発行日 平成20年11月23日
発行所 大倭出版局
〒631 0042 奈良市大倭町1の12
☎(0742)44 0015
印刷 大倭印刷製
定価 1部 250円
年間購読料3,000円(送料共)
振替口座 01050 6 67002
大倭出版局
URL <http://www.ohyamato.jp>



屋久杉の天然林 屋久島 手塚 賢至さん撮影(文・6頁)

昭和38(1963)年11月23日 月次祭法話より

神ながらの道によって人間的向上を

法主 矢追 日聖 (満51歳)

何に感謝するべきか

今日はちょうど勤労感謝の日として国家的な祭日です。我々はいかなるものに対しても日々感謝の生活をしなければならぬのですが、勤労感謝というのは、特に働ける自分に対して喜びを持つということだと思っております。社会とか国家とかが乱れておれば、まじめな気持ちで働きたいと思っても安心して働くことができないう国もありますから、そういう意味において、日本の我々は幸いなんです。

結局、自分に対して感謝すること。まあ神様に感謝するというのが普通の言い方ですけれど、私たちがまず健康にして喜びを持って働けるということは、自分の肉体を通して働けるのでありますから、健康にして働けるような自分の精神、自分の心が一番身近な、感謝する対象であると思っております。

神様に感謝するという場合、普通、お寺に行けば木仏・金仏が並んでおりますし、またお宮さんに行けばお社があつてその真ん中に御霊を鎮めてあるという形をとっています。それが信仰する、あるいは拝む仏様であり神様であると考えられているんですね。いわゆる偶像の崇拜ということになるんです。

大倭で言うところの神は、そうした偶像とか、人格霊——たとえば湊川神社に行けば楠正成、日光東照宮へ行けば徳川家康を祀つてあるような、肉体のなくなった人の靈魂を対象としたものではない

んです。大倭の神様という意味は、形もなければ姿もありません。

大倭のカミさま

大倭は「神ながら」の宗教、「神ながら」の道という立場です。その神とは、万物一切、人間から始まって動物も植物も一切のものに生命を持たしている、育てている、また生み出していくような、自然の宇宙にある神秘的な働きとか、あるいは力とか、いわゆる科学的に言えば地球の根本エネルギーですね。そういうようなものを捉えて大倭の場合は、カミという言葉で表現しているだけなんです。カミという言葉を使わなくてもかまわないけれども、カミという言葉を使うことが一番あてはまるんですね。

大和言葉でいうカミには、実に幅を持った意味があります。漢字のように、微に入り細にわたった文字とか言葉というのは日本にはなかったわけです。だから数の少ない言葉で、そこに幅の広い、意味の深いものがあるんです。

自分より上のものを全部カミと言います。「神」という漢字を借りていますが、借りるのであれば「上」というのが近いんです。

神社というものは、たとえば矢追氏、藤原氏とかの氏神さん、言い換えると大先祖さんの御霊を祀る所です。その人の人格をその場所において尊重する。今日我々子孫が繁栄し幸せに暮らせるということとは、先祖のおかげであるという意味において感謝の祈りをするのがお宮さんであり神社なんです。まあ個人で言えば仏壇ですね。だから病気を治してくれとか、金儲けさせてくれとか、そういう自分の欲求をぶちまけて聞かせようというような対象ではないんです。血の繋がったご先祖

の霊、つまり何々氏のカミ、上ということなんです。身近なところから考えると、親や、また兄や姉でも自分より上にいる。昔はこれもやはり上という言葉を使っているんですね。家の中では、やはり奥さんが一番偉いですから、これもカミさんです。將軍とか幕府というものは、一般庶民から見ると上にあるから、お上というんですね。

カミということをだんだん煎じ詰めていくと、一番最後は、人間を生み出し生かしている天地、言い換えれば地球ということになります。地球は誰がこしらえたのか。科学ではどう説明するのか知りませんが、事実において地球というものがある。太陽もある。何億という星もある。大宇宙において無から有が生じ、これらが物質化するまでに、何かそこにひとつの根本のものがなければならぬ。いろいろなもの全てを最初に生み出したところの根本の働き、根本のひとつの力、エネルギーですね。それが大宇宙のカミさまということなんです。

大倭で言うカミとは、そういうようなものを指しているんです。だから大倭のご本尊は、人格的に、「太加天腹大神」という名前にしてあります。が、元々、太加天腹大神という神様がおって、太陽も地球も星も生み出したという意味ではないんです。宗教によっては、初めに誰かえらい神さんがおって地球も創り、人間も創り、草木も創ったというように説明する場合も世界中によくあるわけなんです。

大倭は神ながらの宗教です。神ながらとは、自然ということなんです。自然宗教なんです。我々には分からないけれど勝手に出来てきている。自然に出来てきているんです。けれどもそれには、創った何かが根本にあるはずなんです。その何かを太

加天腹大神という名称で言い表しているだけなんです。その点はよく理解してほしいと思う。

だから、太加天腹大神という大倭のご本尊は、お社の中に入れて祀ったり、病気を治してくれとか、金儲けさせてくれとか、そんなことをお願いするような対象ではないんです。人間に限らず、天地一切の自然のものを生み出すところの根本の力というものが太加天腹大神さんなんです。あまりにも大きすぎるんです。そういうような神様をご本尊と言っているだけなんです。

天地自然のそうしたひとつの法則というものの、宇宙の大法というものが、現在の地球を生み出し、そして我々は生かされているんです。人間が勝手に計画して人間をこしらえて、というのではないんです。たとえば「女と男とあるから争いがおきるんや」と言っても、これは元々あるんだからしょうがない。だからと言って、これが男ばっかりでも女ばっかりでもしょうがない。

現在、我々人間以外の力において出来上がっているものは、これはもう天地自然、言い換えるとカミさんがそうしたと言わなければしょうがないんです。

生かされていることに気付く

私が宗教に入る動機は、年は若かったですけれども、まだ十六、七歳のときでした。その頃の認識として不可思議なことが余りにもありすぎたからなんです。

たとえば呼吸ひとつでも、物事は人間が計画して、そして人間が自分の意思どおりにやっていると吐く。また吸う。こんなもの意識していたら神経衰弱になってしまうけど、寝ていて意識が全然

ないときでも、やっぱり吸うたり吐いたり勝手にしている。あるいはまた心臓でも、自分が動かさうとしようという意識が全然なくても、勝手に心臓を通じて血液が肉体の中に循環している。さらには、柔らかい米ばかり食べているのに硬い歯や骨が出来てくるし、知らない間に肉がつくしね。海の中でも、きれいな水を吸っているのに、タコやイカは真つ黒なスミを出している。これもおかしいと。それから、ぼちぼち十六、七歳になると、願わなくても勝手に色気というものが出てきて異性が気になってくる。いったいこれは何がこういうことをさしているんだらうと。

そんなことに対して、不思議だと思う人は余りいないと思うんですね。ところが私は何か究明したい、何か知りたい。なぜだらうと考えたり、疑いを持ってあれやらこれやら、よく頭をひねくりました。

まあ医学的に言えば、我々の肉体に神経がある。いろんな迷走神経も走っていれば自律神経もあるから、意識しなくても体はきちんと動いている。

その自律神経を刺激して動かす力は、どこから来るんだと煎じ詰めて考えたら、やはりどう考えても大自然の中にある何かの力によって我々人間というものは生かされているし、心臓も動かされているんだというようなことを、うすうす自分で気が付いてきたんです。人間というものは偉そうに、「わしが働いて飯食って生きてるんや」と言うけれど、そうではない。我々は、自分が自分で勝手に生きてると思ってるけれど、生きてるんじゃない、生かされているんだ、とね。

仮に自分で生きてるのであれば、八十歳でも百歳でも思うところまで生きたい。ところがある時期が来たらみんな死んでいく。その代わりに、また子供が生まれて来る。これも人間の計画

とか意志の力でやっているのではない、自然の力なんです。

そういうことをあれこれ考えて、よく私はノイローゼにならなかつたと思います。結論の出ないような問題に取り組んでね。そういうものは、仮に本を読んだって解決する問題ではないんですよ。私はまた、おかげさんで、霊の世界から教えてくれる。それだけが普通の人とちよつと違うものを持つていたんです。人の知恵を借りて、人の研究した論文とか本を読んで知識を得るとか、悟りを得るとかいうような面倒くさいことはする必要がなかつた。疑問が生じてくるんですけれど、それに対して、霊界からいつも解決してくれた。そういうことが、私の一生宗教で行くという出発点になっているんです。

大倭の宗教で立つ

二十歳も過ぎて三十歳近くになってきて、自分の宗教的な感覚において社会を見て、現在、立派な宗教だ、有名な宗教だと言われる宗教を見た場合に、どうしても不可解なところがある。本當の神ながらの宗教に反している。道が違う。

そうすれば自分がひとつの神ながらの宗教というものをここに樹立しなければいけない。そういうことがぼちぼち分かってくる。分かってくれば霊界のほうから「おまえがそれをやるんだ」という命令が出てくるんですね。これは自惚れでもって、自分の潜在意識からそういうように出てくるのかと、過去に何遍か疑いました。霊界がそう言うからとのほせ上がって、私が慢心をおこして、それで大倭教でもやるうかというようなことは私自身にはないんです。

元々私の頭というのは理屈っぽくて、まあ割合

科学的な考えを持っていてるんです。学校では唯物史観でもって、考古学をやっていましたね。

ところが霊界の問題とか、宗教で行くべき使命というものになってくると、霊界からいろいろ言ってくる。これはもう現界における唯物主義的な頭がいくらあつてもだめなんです。霊界には通用しない。過去において霊界といろいろ問答してまわりましたけれども、結論はいつでも霊界のほうに正しい裏付けが出るんです。人間の考え方が間違っている。

こんなこと言つとあなたたちにはピンと来ないでしょうが、私の場合は、大倭の宗教で立つというのはそのような自分からにじみ出たところを持つていてるんです。いろんな宗教を研究して、いろんな人の知恵を借りて宗教の改革しようとか、宗教をやるうかというような、ただの自分の知識から出てきたようなものではない。そんなものは全然抜きにして、霊界と直接交渉において今日まで来ております。だから現在の倭の宗教というものは、そういう意味において非常に幅を持つているつもりなんです。

肉体と霊魂

先程のカミさまの話から横道にそれましたけれど、私が絶対信頼するのはカミさまなんです。天地自然の万物一切を生生化育してきた根本の力というものの、宇宙の大法というものが私の言うところの太加天腹大神であり、これを仮に「加美」という文字で表現してもいいんです。

霊界からいろいろ暗示を受けるとか、あるいは霊的に問答するのは、過去に亡くなった立派な人格の霊魂ではあるけれど、加美さまではないんです。霊だけの社会があるということを私は信じて

います。これは分かりにくいけれど、霊界においても現界と同じ社会があるんですね。

宇宙の大霊は、万物一切の生命力として動いている。私が現在生きていくということは、私の肉体を動かしている宇宙の生命力を私もまた持っているということ。あなたたちも持っている。我々人間であれば、肉体に入っているひとつの生命力、物を考える力、まあ電気みたいなもの、そういうものを個人個人が皆持っている状態なんです。

そして、肉体にそういう力が今まで入って仕事していたとしても、肉体というものは物質ですから時期がくれば、みんな腐ってしまう。しかし霊魂、即ち宇宙の生命力というものは腐りません。だから肉体が腐ってもその肉体に働きかけていた生命力だけが残るんです。その残ったエネルギーというものが、宇宙の大生命の中にひとつの細胞のような形において溶け込んでいます。

我々の肉体でも皮膚をめぐって顕微鏡で細かく見れば、いろんな細胞が寄り集まって形ができています。それと同じような形で宇宙の大霊の中に、霊魂というものが融和していく。肉体を支配していた霊の働きはなくならず、肉体のない人間の世界というものが別に出来ている。そこにおいても、やはり勉強する者はしているし、研究する者はしているんですよ。けんかする者はけんかしている。

そういうような霊の世界で、私にいろんなことを言ってくるのは、一番高級な人格霊なんです。私は肉体を持っていませんけれど、その霊魂は肉体のない人間が、お互いに時代とか時間というものを超越した世界において話し合っています。

大倭はこういう行き方をしなければいけないか、あるいは人に対してこういうように教えなければいけないとか、いろんな知識を霊界人が私に教えてくれます。これは魔神でも邪神でもなんでもない、霊魂なんだ、姿のない人間です。

私は今五十歳になっても、一人前の人間として通用するのは、物事が分かってからこの三十年ほどだけですけども、何千年、何万年というような年功のいった人格霊がいろんなことを教えてくれるんです。

また我々現界は見通しがきかないですが、霊界は見通しがききます。先のことも教えてくれますよ。結局、現代の人間界の科学よりも、もう一歩前進しているんです。その知識を、私にいろいろ教えてくれるから、まあ今日の大倭という形をとってこれたわけです。

自分は大宇宙の小神さん

結局、勤労感謝の日は、本当は加美さまに感謝するべきものなんです。

そうなんだけれど、身近な自分を忘れておいて、ただ加美さまに感謝すると言ってもつかみどころがない。自分は、大宇宙の生命、いわゆる太加天腹大神というもののひとつの分身、ひとつの細胞です。だから自分に感謝するということは天地自然の大神様に対して自分を通して感謝しているということになつてくるんです。そういう意味において、健康で働けるということは非常に結構だ、幸せであるというようにして、感謝の生活をするのが本当の勤労感謝だと思っんです。

大倭の宗教というのは余りにも幅が広すぎて、つかみどころがないんです。けれども、これは味の世界ですから、日が経つほどにぼつぼつと分か

つてくると思います。

一番先に宗教として必要なことは、自分というものを練磨すること。肉体の練磨も必要だけれど、まず心の練磨も必要なんです。我々のひとつひとつに入っている霊魂は、宇宙の太加天腹大神さんの小神さんと仮定してもいい。自分の心、肉体の中にあるところの加美さまですね。

精神とか心とか、それは全部同質なだけで、いろいろ色彩が違ってきます。これは十人十色ですから、一人一人が練磨する方法は違ってはいるはずなんです。

訓練して人間的な向上を図っていくことによって、我々の日々の精神状態がよければ、家庭をつくる場合でも、社会をつくる場合でもそこに美しいものが出来てくるんですね。

これはひとつの理想論です。個人を向上させるということとは難しい問題ですけど、お互いに罪のない、住みやすい幸せな社会をつくっていくというのが理想です。そういうような社会の一員になれる自分を作り上げていくためには、まず自分を向上させていくことが先決なんです。

日々の生活を通して、いろんなものを通して自己を磨いていく。仏教では悟りという言葉で言い表しています。

そういうものが寄り集まってくると、自然に立派な麗しい家庭もできれば社会もできる。これは、いわゆる天地自然の理想だと思っんです。そのため、我々大倭の場合には、神ながらの道によって自分を鍛えていくんです。

皆さん方も、神ながらの教えによって自分を向上させることが、自分個人および社会全体の幸福であるということを銘記して、どうか信仰を続けていってほしいことを希望します。



旅行雑記① オリンピックピック一年前の北京へ

奈良市 川端 一弘

結婚以来夫婦で旅行などしたことはない生活を送ってきました。また自身の旅行といっても大倭会での旅行や組合の懇親旅行ぐらいで家族旅行はまったくない日々でした。父の世代もそうであったように日本の普通家庭ではなかったでしょう。零細な工場では週休二日制になったのもつい最近のことで、月の休みが1日と15日という戦前（江戸時代以来）を思わせる家内工場も近所にはありません。毎日が日々の稼ぎに追われるような日常でした。それが日本の戦後（戦前も）であり極端な生活として送っていたわけでした。

昔は定年が55才であったはず（今も一応定年として区切りし、その後は再雇用という大企業が多いそうです）ですが、事情があり昔の定年を少しすぎて現在では早めになる実社会を卒業いたしました。それからは毎日が日曜日となったわけでした。親友の一人が再就職を選択せず定年後大学院へ進学をいたしました。それに習うともなく拙い論を書く日々です。

そのような私が昨年から二度海外へ行き、北海道、沖縄、九州とまるで今までの分を取り戻すかの如く夫婦で旅行する機会に恵まれました。もちろん驚くべき安いバック旅行で時間に追われる目まぐるしい旅行です。

最初の海外は北京でした。北京はオリンピックの一年前で町中が大急ぎで改造中という風情で埃っぽい感じでした。黄砂の時期が終わったばかりで、その時期には町中が砂埃になるそう、その埃がたまっただけだったのでしょか。空港は拡張中であり鉄道、道路もあちこちで工事を行っていた。

ました。

高速道路脇にはたくさん木々が植えられていました。雨が少ない地域で育てるには散水が必要と思われ、事実一部では散水器が稼働しておりました。のちほど北京の水不足の現実を見るわけですが、かなり無理をして首都の体面を拵えているようでした。

市中の道路（幹線道路は6車線あり広い）は車であふれ二ユースで見た天安門前を自転車通勤する光景は見られません（写真下）。躍動する中国を目の当たりにしその成長ぶりを実感しました。

観光コースには日中が戦争状態になるきつかけとなった盧溝橋見学がありました（写真左）。中国の添乗員さんはいへん気遣いをされて日本を非難することはなかったです。歴史を乗り越えて友好を計ろうという気概さえ感じました。実地を見て北京で軍隊が展開していたこと事態（盧溝橋は北京郊外とされるが町はずれといった処で、古い城門があり町の入り口を守っていた）が本来なら非難されてしかるべきと感じました。歴史の一端を垣間見



ました。驚いたのは広い河原に一滴の水がなく草が生い茂り草原のようになっていたことでした。長期間水が流れていないのは明かで、添乗員さんの説明では雨後の時だけ水があるとのことでした。

万里の長城もコー

スに入っておりまして。北京郊外の八達嶺の長城でした。途中に農園に寄りサクランボなどの栽培を見ました。しかし、ダム湖には水がほとんどなく小さな池のように干上がっておりまして。北京の水需要を満たすために農業用水が犠牲になっているとのことでした。果樹であれば少ない水でもある程度は栽培が可能だと思われ、実りの時期に雨を嫌うサクランボは適地であるように見えました。郊外の山々の木々は灌木といった程度しか成長しておらず谷筋の例外を除き大きく育つことは不可能のように見えました。

万里の長城は蒙古との戦いの遺産です。日中も早くわだかまりのない遺産として盧溝橋を見学できる日々が来ることを望んで止まない気持ちになりました。

北京旅行では景観や歴史的建造物を楽しみました。そのなかで名前は分らなかったですが故宮の石垣に咲いていた草花、パンダ見学の動物園で見たウツギ科の木や万里の長城では力エド科の木など日本にはない草木も楽しみました。

数日の皮相な体験でしたが、同時に日本にいてはなかなか実感できない緑と水の大切さをあらためて感じさせる旅行でした。



山尾三省生誕70年祭

——大倭と三省を結ぶもの

鹿児島県屋久島町 手塚 賢 至

山尾三省没後七年を経て今年には生誕七十年を迎える。この機に誕生日の十月十一日、生まれ故郷、東京、御茶ノ水にある全電通会館で、「アニミズムという希望」と題した「山尾三省生誕七十年祭」が開催された。主催者は大倭紫陽花邑とも縁の深い野草社の石垣雅設さんはじめ、これまで山尾三省の著作を世に送り出した出版社の方々が集った実行委員会。後援は山尾三省、生前の居住地屋久島で、没後設立された「山尾三省記念会」。

私はこの世話人会の一員で、今回同時開催された「山尾三省回顧展」の展示を任され、屋久島より上京し、参加させていただいた。

当日の会場は五百人もの熱気につつまれた。リレートーク、シンポジウム、コンサート(三省の詩を歌う)を通して、山尾三省の文学や思想が新しいひかりのもとに照らされ、「アニミズムという希望」という古くて新しい主題、これこそが抜き差しならぬ現代の混迷を解く鍵、キーワードであることが感得されたと思う。

また、東京での催しに触発されて、十一月三日には鹿児島市でも同様に「七十年祭」が開かれ盛況であったが、両所での催しに関わり山尾三省の再評価について語られた様々な報告は別な機会に譲るとして、ここでは、山尾三省の矢追日聖さんの帰幽に際して書かれた文章を是非紹介しておきたい。

この度の回顧展にあたり、私は改めて著作を読み直して、著者の晩年に精力的に著述した、森羅万象に生命・カミが宿るといふ「アニミズム」に

ついでに思索に時代の光明をみる想いである。ここに紙幅の限りに断片を伝えるだけだが、山尾三省の、法主さんへの敬愛にあふれ、時空を超えたアニミズムの本質へと迫るこの文章は、『自然生活』第十一集・特集「矢追日聖さんありがとう」(1997年春号)に発表された「南の光のなかで」の連載。この連載は後に野草社の単行本『南の光のなかで』にまとめられ、そこでは「心安うになあ」と章付けされ、まず自作の「オリオン星」の詩に続いてこう始まる――

「この二月九日に大倭紫陽花邑の法主さんこと矢追日聖師が帰幽された。かねてより顕幽一如と言われ、霊界(身体を離れた世界)と楽しく遊ばれてきた方であるから、その知らせを受けても無念や悲しみの感情はさほどなかったが、その日の夜に眠りに就こうとした時に、私の身にもある異常が起きた。

——中略——

最近何年かの法主さんと思うと、へ心安うになあ」と奈良のことばでしきりに私達に言われたことが印象ぶかいが、その意味はむろん心安うになあということではなくて、なかよしになあということであろう。ある人が、ある人と心安い間柄であるといえ、それはその人たち同志が親しい間柄にあることだ。

関西人でない私には正確なところは分からないが、晩年の法主さんが「へ心安うになあ」と言われる時、私はその言葉の響きが大変好きで、いいことばを使われるなあと常々感心していた。

そのことばを私に引き寄せ使わせていただくなら、法主さんは、奇稲田日女命、須佐緒命、あるいは奇玉饒速日命というような古代の霊神と心安うに交わり、もって時代を下れば聖徳太子とか光明皇后とか日蓮さんの霊と心安うに交わってこ

られ、その交わりのなかで、大倭紫陽花邑という、古代の香りのする明るく静かな霊的な邑をつくられた。

どこからどこまでを古代と呼ぶのか、じつはそこが問題なのであるが、奈良の大倭紫陽花邑を訪ねれば、大和朝廷が成立する以前の諸豪族時代以来流れている地霊神の香りが、邑内の樹木や池や道、磐座や人からそこはかとなく感じられるのは事実であった。つまり、天ツ神ではなくて国ツ神の放つ、明るくしめやかな土着の香りである。

法主さんは、そのように古代霊と交わりながら、いわば古代を現代とし、現代を逆に古代化して生きてこられたのであるが、そのことの含んでいる意味は、見かけよりもずっと深いものがあることを、最近の私は思う。

というのは、歴史というものを、古代、中世、近代、現代と分けて見て行くことはむろん一つの識見であり常識でもあるが、歴史の遠近法というものをもっと奥深く広げて見るもうひとつの見方があってもよいのではないかと私は考えはじめているからである。――後略――

法主さんと大倭の存在を通して、古代を現代化し、現代を古代化、することで歴史に学び、歴史を生きることの意味が静かに説かれている。三省と大倭を結ぶもの、その「親和力」のひとつの表れとしてここに紹介させていただき、是非ご一読をお薦めしたい。

表紙写真について

濃い霧につつまれる屋久杉の森は静寂の世界。海沿いの永田集落から屋久島第2の高峰永田岳(1885m)へと続く永田歩道は、森林植生の垂直分布を長い長い道のりを経てたどりゆく。行き交う登山者もなく、ただでさえ森閑とした森に霧がかかる幽玄の気に引きこまれる。

寸 紗

第82回

山 崎 奈紀佐さん



看護師への道

今回登場してもらう山崎奈紀佐さんは、ほとんど大倭生れの大倭育ちと書いている若者である。ほとんど大倭町の隣りの菅野台に住んでいたからだが、母方の祖父の青山日元さん達が住む大倭にはいつも遊びに行っていた。昭和五十二年二月二十日に産声をあげた時も、大倭で助産婦の畑中さんに取りあげてもらっている。

奈紀佐という名は、「九州の阿蘇に住む父方の祖母が、海のことが大好きでナギサという音を選び、漢字は法主さんが決めてくれた」。

その奈紀佐さんに、どんな子供だったのか問うと、「勉強も運動も二ガ手だったけれど、よく喋る子だった。家の中のことまで誰にでも何でも喋るので、母親は困っていた」と

笑って答えてくれた。

父親の職業が大工だったので、手作りで勉強机を用意してくれて、その時々が必要に応じて脚を切ったり、大きさを覚えてくれたりした。その頃は、机も買えないくらい貧乏なのかと嘆いたものだが、今にして思うと、とても贅沢なことだった」としみじみと語る。

子供の頃の楽しい思い出として大倭子ども会の活動がある。「毎年の夏休みの宿泊キャンプで吉野や柳生や色んなところに連れていってもらって、クタクタになるまで歩いたことや、降誕祭の直会演芸会で発表するために『注文の多い料理店』や『雪渡り』などの劇の練習をしたことなど忘れられない」という。

看護師を職業として選んだのは、「子供の頃から、ごくあたり前のように思っていたから」とのこと。地元の高雄南中学校を卒業してから奈良

県立北和女子高校の衛生看護科に進学して、それ以後多少の紆余曲折はあったものの、看護師への道を歩むことになる。

衛生看護科の一年生の終りに病院実習に行った際に、「怖い実習指導者がいて震え上がったが、人の命を預かることの厳しさを学んだ」という体験もする。

十八歳で准看護師の試験に合格してから、天理市にある高井病院から奨学金をもらって、正看護師の資格をとるために奈良文化女子短期大学に進学する。その入学を法主様に報告したら、お祝いを手渡してくれて、そこに「入学おめでとう。将来は大倭病院で働いて下さい」と書いてあって、そのことは、「心のどこかで気にかかっている」という。

ところが、この短大では、「担当の教師と相性が悪く、レポートに厳しい注文をつけられたり、余分な一年実習を受けると言われたりして、三年目で退学を決意するというハプニングを起こしてしまう。

その後、すでに働きはじめていた高井病院のオペ室（手術室）での仕事に集中することになる。「気はきつけれどサバサバした先輩達や昔気質の医者とみっちり仕事をするのは充実感があった」というから、この仕事は天職だったようである。

二十三歳の時に、職場で勧められて県立奈良病院付属看護学校を受験し合格する。「それまでの仕事の体験があったので、二年間の学生生活はとても楽しかった」。そして、国家試験にも無事合格する。

高井病院からは奨学金をもらっていたので、三年間は「お礼奉公」をしなければならなかったが、「オペ室での仕事にやりがいがあった」、「結局九年間も働き、最後はオペ室の副主任にまでなった。「オペ室というのは患者が一番不安を感じる場所」で、その不安をとり除くために、どの患者にもやさしく気を使う必要がある。副主任として、その点を大切にしたい」と責任感が強い。

「看護師は命にかかわりのある職業だけに、目に見えない霊的な存在に対して敏感な人が多い」と奈紀佐さんは語る。彼女自身もそうした体験を持っているが、「ごくあたり前の自然なこととして接したい」と冷静である。

趣味は、劇団四季の舞台を観ることと、二年前からはじめた乗馬。動物は好きで雌犬の「オハギちゃん」を飼っている。「何もしないでポーツとしているのも好き」という。「一休みしたくて、この十月で退職したが、将来も「オペ室」で働くつもり。」

（聞き手＝岸田哲）

あじさい日誌

10月12日 榎会。「一年を振り返っての一言」を話しました。
 10月13日 あじさい邑の故中島康治さんの五年祭が、大倭会館で行われ、60人程の方が参列されました。

10月15日 大倭神宮月次祭。
 10月19日 大倭町自治会秋のりクリエーションで和歌山県有田へみかん狩りとマリーナシテイ・黒潮市場でひと時を過ごしました。

10月23日 大倭大本宮月次祭。
 この日は昭和38年10月23日の法話CDをお聞きしました。
 10月24日 昇ちゃん文化行事旅行を前に大倭病院で点滴を受けたいらしい。自己管理です。
 10月25日 新奈良ゴルフ倶楽部で第11回大倭会ゴルフコンペ。
 10回までの優勝カップ取切り記念大会。



10月26～27日 大倭会第300

回記念の一泊文化行事で、北陸能登半島方面を訪ねました。(12月号で詳細報告)

11月2日 馬場田で脱穀。お天気に恵まれ、参加者18人(内子供1人)で順調に午後1時頃に終了して大倭会館で昼食。
 高橋良美さんの話「昨年以上を期待していたのですが、なかなか思うようには行かないものですね。でも祭典用のおもち是一年分いけそうです」。

11月6日 大倭神宮月次祭。夜、大倭会館で邑倭の会。
 11月8日 午後2時より第20回大倭会文化講演会。講師に神谷文義さんを迎えて「交流(むすび)の家と私のテーマに対し、参加者75名程。後の懇親会にも50人位の方が参加、12月9日に京都の天橋立で藤本宏秋さんが中心となってひとり芝居「地面の底がぬけたんです」を公演予定との呼びかけもありました。

第6期に入る「NPO法人むすびの家」は午前中、交流の家で総会をして、午後は文化講演会に参加してくれました。
 大倭安宿苑では
 10月30日 法人・長曾根寮・八重垣園・茂毛路園に奈良市の指導監査と奈良県の実地指導
 11月1日 長曾根寮施設長に舟橋宏祐さん、茂毛路園施設長に齊藤功さんが就任。

10月18日 秋の大運動会。晴天

の下、新館になって初めて外で行いリフレッシュしました。(須加宮寮)
 10月8日～9日 宿泊旅行で住苑者18名が皆生温泉へ。水木しげる記念館等を楽しみました。(長曾根寮)

10月28日 (デイスサービス)おやつ作りは「たこ焼き」。
 11月3日 書道。(八重垣園)

10月16日 お赤飯で誕生者のお祝い。
 投句箱より「秋日より晴れ姿の七五三」
 俳句の風物 上田森彦(98歳)
 秋深き隣は何をする人ぞ 芭蕉



馬肥ゆる爽やかな初秋、虫すだく中秋が過ぎ、枯葉も消える晩秋は日増しにうら淋しさがつのる。淋しげは言わずに、心を出している。
 街の灯も秋の深むを知るらし
 森彦
 (茂毛路園)
 10月11日、入居の方のお誕生日当日にお祝い。

あんない

* 金鷄祭(大倭神宮)
 12月4日(木) 午後2時より大倭神宮にて。
 金鷄祭については、『やわらぎの黙示』百二十三頁「日本精神の源流」―長曾根邑のすめらみこと―参照。

* 月次祭(大倭神宮)
 12月6日(土) 午後2時より大倭神宮にて。
 * 大倭会主催第四八〇回榎会
 12月14日(日) 午前9時より恒例「掃除みそぎ」として、大倭紫陽花邑境内の大掃除です。
 これに先立ち8時より大倭臺地の掃除が行われます。

* 月次祭(大倭神宮)
 12月15日(月) 午後2時より大倭神宮にて。
 * 大倭神宮境内・周辺大掃除
 12月21日(日) 午前10時より行います。有志の皆さんはご参加下さい。昼食はお弁当が用意されます。

* 日聖祭(大本宮拝殿)及び直会演芸会
 12月23日(祝)
 大倭元旦
 上の「ご案内」をご覧ください。

日聖祭のご案内

大倭六十五年 一元旦
 法主日聖師のお誕生を記念する祭典

- 午前九時四十五分、法主様の奥津城に参拝。
 午前十時より土師部社にて参拝。
 午前十時三十分より大倭大本宮拝殿において日聖祭がとり行われます。
- 午後一時より大倭安宿苑長曾根寮の《あじさい広場》で祝賀の直会演芸会が催されます。昼食は直会弁当を用意しますのど、どなた様もご遠慮なくご参集下さい。

- 直会演芸会に出演される方を募ります。あなたのやりたい事をやって共に楽しませて下さい。時間は十分前後くらいです。
- 十二月十五日まで受け付けています。

◆ 直会演芸会実行委員会

TEL 〇七四二一四四一〇〇一 番 大倭印刷 中島武宣まで